

標準語と宮沢賢治

——方言と標準語のはざままで

小島聡子

一 はじめに

宮沢賢治の童話の言葉遣いは、子供向けの易しい文体であるはずなのにもかかわらず、意味が分からないというほどではないものの違和感をもつ部分が少なくない。この違和感は、単に「少し前に書かれたものだから」という所為もあるが、それだけでもない部分がある。

この違和感をもたらず要因はいくつか考えられる。一つは、方言の影響である。宮沢賢治の作品中には意図的に方言を用いた部分があることはよく知られている。しかし、ここで言う「方言の影響」は、「標準語」とおぼしき部分に現れる「気づかない方言」とでも言うべきものである。

さらに、もう一つは、宮沢賢治のいた岩手が東京からはなれていて言葉の変化が伝わるのに時間がかかるためにみられる言葉の「時差」の問題である。

宮沢賢治の作品は書かれてからすでに百年近くが経過しており、やや昔の言葉で書かれていることは確かである。しかし、話し言葉は拙くとしても、書き言葉は（仮名遣いや漢字の字体は変わったが）実はこの百年でさほど大きな変革があったわけではない。大正から昭和初期の作品は、もちろん多少古めかしい見慣れない語句が使われていたりするということはあっても、総じてさほど違和感なく読めるのだが、宮沢賢治の作品の言葉遣いは、同時期のものと比べると少し違和感が強い。実は、宮沢賢治の言葉遣いは同時期の言葉よりさらにもう一世代古い感じがするものがあるようなのである。これは、地方で書かれた

言葉に表れた「時差」とでも言うべきものかと思われる。

本稿では、すでに考察してきたものにさらに付け加える形で、宮沢賢治の言葉についてこれらの点に注目しながら考えてみたい。

二 「標準語」との出会い——小学校時代の宮沢賢治

「標準語」は、近代化の中でその必要性が提唱され、当時すでにある程度共通語的な地位を占めていた東京の言葉をもとに作られたとされている。そして、第三次小学校令改正（一九〇〇年）を機に国定読本（第一期）を通して「標準語」が全国の学校で教えられることになった。宮沢賢治の小学校時代はちょうど「標準語」が学校教育を通じて全国に広められていく時期に重なっている。つまり、宮沢賢治は、最初期の「標準語」教育を学校で受けた世代であり、さらに、その後も東京での滞在時間が短く、「標準語」の基盤となった東京の言葉に接する機会が少なかったという点で、大変興味深い存在である。

近代文学の世界で、特に言文一致体を担った作家たちは、東京で成長していたり、少なくとも高等教育を東京で受けていたり、「標準語」に近い言葉が使われているところに身を置いていた人が多く、地方で生まれずと地方にいた人は少ない。

その中で、宮沢賢治はいわゆる「標準語」にはあまり馴染みがない環境で育ち、学校で「標準語」を習い、その習った言葉で書いていたわけである。宮沢賢治の用いる「標準語」は、学校で教えた「標準語」がどう定着していったかを考える格好の資料と言える。

宮沢賢治が「標準語」と格闘していたであろう様子は、例えば子供の綴り方にも表れている。『新校本宮沢賢治全集 十四 雑纂』の冒頭には小学生のころの作文、綴り方の類が掲載されているが、その中の小学校六年次当時の「国語綴り帳」をみると、方言の音韻の影響と思われる書き間違いの類がいくつかみられる。

例えば「ぶち犬をきすかけられて」（「冬季休業の一日。」）とあるのは「けしかけられて」であろう（「きす」の部分には傍点が付されているという）。し、「貨へいをえ直したり」（徳川吉宗）とあるが、これは「い直す」と直されているという。また、「勉強しやすい」が「べんきょーしやししい」になっている（「古校舎をおもふ」）のも、「す」か「し」の区別がつきにくい方言の影響が考えられる。普段「し」と「す」の中間的な音で発音しているものについては、書く時には「し」か「す」か

を判断して書き分けるが、その際に、「す」でよいところを「し」にしてしまったもので、いわゆる過剰適応の例と言える。また、音韻ではないが「こればかりと思つて堪忍し（中略）こればかりと思つて堪忍せば」（「堪忍の六助」）というのもある。後半で「ばかり」が「ばり」となつてゐるのは、やはり方言の影響であらう。

もちろん、これらの作文は小学生のころのもので、大人になつてからは状況も異なるであらうが、少なくとも、小学校のころ優秀で表彰されたこともある宮沢賢治でさえも、「標準語」的なものに苦勞してゐたであらう様子はうかがい知ることができる。そして、大人になつてからもどんな言葉で書くかということに終始心を砕いてゐたことは、様々な作品や手紙などの端々からもうかがわれる。宮沢賢治にとつて同時代の他の作家に比べてもその言葉の問題は大きかつたであらうが、その始まりは小学校のころからであつたと言えよう。

三 方言からの影響について——「ほしいくらい」再考

宮沢賢治の言葉について研究してゐると言うとき「オノマトペについてか」と問われるくらい、宮沢賢治のオノマトペが多様でかつ独特であることについては広く知られてゐる。しかし、そもそもこのオノマトペの頻度の高さも地方的な特徴である可能性がある。東北地方の人々が他の地方の人々に比べてオノマトペをよく使う傾向があることは、三井・井上（二〇〇七）や小林・澤村（二〇一四）などに説明されている。また、独特であるとされるオノマトペの中に、岩手の方言としては一般的なものが含まれることが川越（二〇〇八）に指摘されている。

しかしながら、宮沢賢治の言葉はオノマトペ以外のところにも地域の言葉の影響と思われる表現が随所に現れている。

ここでは、筆者が以前取り上げた（小島二〇〇八、二〇一三）「くらい」という副助詞について再考したい。

『注文の多い料理店』の序文に次のような部分がある。

わたしたちは水砂糖をほしいくらい持たないでも、きれいにすきとほつた風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。

この「ほしくらい」という部分は、東京方言話者の筆者にとつて、かなり違和感がある。ここで「ほしくらい」は文脈から推察しておそらく「すきなだけ」あるいは「ほしだけ」などという言い回しに相当するのではないかと考えられるが、微妙にニュアンスが違うのではないかという気もしていた。

試みに、現代語の様相を探ることのできる資料『現代書き言葉均衡コーパス』(以下BCCWJと略称)¹で調べると「欲しい位」は三一件見つかる。しかし、うち一件は当該例の引用で、それ以外は当該例のような「望んでいる十分な量」という意味で用いられている例はなく、「体が熱く扇風機がほしくらいなので」(Yahoo知恵袋)や「こっちが教えてほしくらいだわ」(綾乃なつき『夢見る乙女じゃいられない』)のような例ばかりである。一方、同様にBCCWJでは「すきなだけ」は二二二件見つかるがそのうち当該例のような意味の例は一九五件、「ほしだけ」は六六件で当該例と同様の意味は一八件である。おそらく、現代語では「すきなだけ」というのが一般的な言葉遣いで、少なくとも「ほしくらい」はあまり一般的とは言えない。

一方、宮沢賢治の時代とほぼ重なる時期の資料『日本語歴史コーパス 明治・大正編I雑誌』(以下、CHJと略称)²では、「ほしくらい」は五件見つかるが、やはり「今夜は軀が兩三個欲しいくらゐ忙しいんだから」(太陽 一九〇九・佐野天声「銅山王」という例のように比較の基準を表す用法に限られている。ただし、CHJでは「ほしだけ」も「すきなだけ」も見つからないので、宮沢賢治の時代には「すきなだけ」が一般的であったというわけでもない。

さて、前稿で「ほしくらい」については扱った際には、いくつかみられる宮沢賢治特有の「くらい」の用法とただで、これが方言の影響である可能性については触れなかった。

ところが、その後、釜石で地元の方の家に伺う機会があり、昼食に美味しいおこわを、ごちそうにあずかった。その際、正に「ほしくらい」取るようにと勧められた。その時初めて件の宮沢賢治の表現が実際に使われたのを聞き、方言由来であることに思い至った。

そこで早速、岩手大学の大学院生たち数人に聞いてみたところ、岩手県・秋田県・青森県出身の学生たちはこの表現に違和感はないということであった。地元の集まりなどでお菓子の入れ物のそばに「ほしくらい取りなさい」などと書いてあったりするという証言も得た。あるいは「すきなくらい」という言い方もあるという。八戸出身の学生は「ほしくらい」は

言わないが「すきなくらい」と言うとのことであった。(この場合の「だ」は「な」の音訛である。)かなり広い範囲でこの「くらい」の使い方がみられるようである。なお、筆者には、「すきなくらい」も「ほしくらい」と同様に違和感がある。BCCWJでは「すきなくらい」は四件見つかるが、いずれも「すきなだけ」という意味ではない。一方、学生たちに「ほしくらい」はあまり他所では聞かないということのを伝えると、一様に驚いた様子であった。学生たちにはこの表現が方言だという意識はないということであろう。

さらに、岩手大学の教養教育の授業で学部学生たちに、「ほしくらい」・「すきなくらい」という表現の使用の有無、違和感の有無についてレスポンスカードに記入してもらった。以下にその一部を抜粋して紹介する。なお、カッコ内は出身地である。今回は小・中学校のころにいたところを書いてもらった。

・言われたことがある気がする(秋田・大仙市)

・「好きなくらい・ほしい分」の方が違和感はないが意味は分かる(秋田・秋田市)

・「ほしくらい・すきなくらい」は意味が通じる(青森・十和田市)

・日常でも耳にするし意味も通じる(岩手・盛岡市)

・「ほしくらい・好きなくらい」はある(岩手・花巻市)

・「ほしくらい」はどこで使われていたかは覚えていないが違和感がないため小さいころから聞いていたと思う(岩手・盛岡市)

・特に違和感はない(岩手・盛岡市、花巻市)

・「ほしくらい」で意味はわかる。「すきなくらい」の方を使う(岩手・盛岡市、宮城・石巻市)

岩手・秋田・青森・宮城出身の学生たちは、意味が分かるだけでなく違和感もあまりないようである。ただし、「ほしくらい」よりは「すきなくらい」の方が使用されているらしい。また、他には「くらい」でなく「だけ」や「分」を用いるという意見もあった。

・このままで意味が分かる。書いてあるのは見たことがないが会話では使っているかもしれない。「ほしただけ」の方が自然な気がする(福島・会津若松)

・意味は分かるが「だけ」という方が多い(青森・八戸市)

もちろん、「初めて聞いたし最初意味がすんなり入ってこなかった」とする八戸市出身の学生もあつたが、東北地方出身の学生たちは、さほど違和感をもたない様子である。

一方、東北以外の地方の出身者は次のような回答で、やはり少し感覚は異なるようである。

・意味は分かるが違和感がある(静岡・伊東市)

・言われたことがあるかは記憶にないが意味は分かる(長野・佐久市)

現在、大学生たちの若い世代は、いわゆる方言には殆ど馴染みがなく、話せないばかりか聞き取れないという人も多い。そこには、テレビ等の影響ももちろんあるが、何よりも地域の人々が子供に接する際に方言を使わなくなってきたことの結果でもあると思う。しかしながら、限られた人数の調査ではあるが、今の学生たちが「ほしいくらい」「すきなくらい」という表現に馴染んでいるということは、地域の言葉として、特に方言と意識されずに「ほしいくらい」「すきなくらい」という表現が用いられているということの表れであろう。

さて、気にして調べるようになってみると、他にも、「くらい」の用法で気になるものが見つかった。田野畑村の大芦地区の言葉についてまとめられた『大芦のことばとその周辺』(牧原二〇一四)には、「くらい」に相当する語形「くれー・くれえー」のところに

いーくれーにしてやめだらやー・いーくれえーにしてやめだらやあー(それ位にしてやめたらどうだ)
いえーくれえーにせえー(いいくらいにしてよね。ほどほどにしてよ。)

という解説が記載されている。

「いい」と「くらい」の組み合わせ自体は珍しくはないが、このような意味での用法はやはり筆者は違和感をもつ。試みに BCCWJで「よい」と「くらい」の組み合わせを検索すると、三七七件ほど例が見つかるが、しかし、殆どが「〜方がよいくらいだ」「〜て（も）よいくらいだ」「ちょうどよいくらい」という類型的な表現で、「いいくらい」で具体的な程度・量を表すものは見当たらない。同様に、C H Jで検索しても結果は同じである。やはりこれも「くらい」の地域独特の用法の一つと言つてよさそうである。

「くらい」の前に「よい」や「すき」「ほしい」という語が付くこと自体は珍しいわけではない。しかし、BCCWJやCHJで検索された「ほしいくらい」の例は殆どは、「ほしい」等の前にさらに「ほしい」内容が示されるなど具体的な状況を示したうえでそれを比較の基準として示す用法である。一方、当該例の「ほしいくらい」やそれに類する「すきなくらい」、また大芦方言の「いーくれえー」での「くらい」は、比較の基準を示しているわけではなく、程度・量を示すもので、用法がだいぶ異なっている。「くらい」で量を示す場合、標準語では、具体的な指示内容が必要とされ、「ほしい」や「いい」のような具体性に乏しい、あるいは人によって量や程度が異なるような語に「くらい」をつけても量・程度を示すことは難しい。その点で、「くらい」の用法は標準語の方が限定的になっていると言えよう。

四 言葉の「時差」について

次に、「全体」という語を例に、宮沢賢治の言葉に「時差」が表れている可能性について考えてみる。

最近、宮沢賢治の言葉でよく引用されるものに『農民芸術概論綱要』の「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という一節がある。

ただ、この文の意味が、賢治の意図した以上の意味に取られているのではないかと気になっている。問題なのは「ぜんたい」である。この部分、「世界全体が」と言い換えられてしまっているのを聞くこともあり、多くの人はそのように捉えているのではないかと思われる。しかし、この「ぜんたい」は文全体にかかる副詞であつて、宮沢賢治は決して「世界全体が」とは言っているわけではない。

実は、宮沢賢治は、よく「ぜんたい」を現在なら「いったい」「そもそも」というような意味の文副詞として用いている。次のような例である。

ぜんたい雲といふものは、風のぐあひで、行つたり来たりほかつと無くなつてみたり、俄かにまたでてきたりするもんだ。
 (山男の四月)

現在では、「一体全体」という形ならあるが、単独で「ぜんたい」を副詞として用いることはあまりない。そのため、おそらく先の例についても多くの人が「世界全体が」と捉えてしまうのではないかと思われる。しかし、この「ぜんたい」はあくまでも「そもそも」というような意味になる副詞であまり強い意味はない。とはいえ、「世界が」と言っている時点で「全体」がなくても意味はあまり変わらないかもしれない。しかし、それでも「世界全体が」と強調しているわけではなく、単に「世の中が」程度のことだったのでないかということとは指摘しておきたい。

ところで、近代語の流れを見るとこのような副詞としての「ぜんたい」は「いったい」と入れ替わっていくようにみえることは以前指摘した(小島二〇〇六)。つまり「ぜんたい」を使うこと自体は少し古い語法なのである。

例えば、C H Jで副詞として用いられている「全体」と「一体」について検索した結果は表1の通りである。

もちろん、口語と文語の文体差の問題もある。

表1 「全体」と「一体」の頻度

	総語数	ぜんたい	%	いったい	%
明六雜誌 (1874-75)	一七八六一	三	0.017	六	0.034
国民之友 (1887-88)	一〇〇六九〇二	二五	0.025	一七	0.017
女学雑誌 (1881-86)	五八八七五二	七	0.012	九	0.015
太陽 1888	二〇三三四九九	二一	0.010	四七	0.023
太陽 1889	一九七四三八二	三八	0.019	五一	0.026
女学世界 (1909)	五三三三六四	八	0.015	八一	0.155
太陽 1909	一八六五三七七	四七	0.025	一七三	0.093
太陽 1917	一七九八二九八	一三	0.007	一一八	0.071
太陽 1925	二〇二八七八九	二六	0.013	二二六	0.107
婦人倶楽部 (1925)	五三五七七六	三	0.006	七〇	0.131

るので、この比率はあくまでも目安ではあるが、「ぜんたい」は一九〇九年の『太陽』をピークとして減っていくのに対し「いったい」の方は全体として増えていくという流れである。

一方、『注文の多い料理店』（一九二四）では、「ぜんたい」は七例、「いったい」は二例である。この比率は、同じ時期の一九二五年の『太陽』や『婦人倶楽部』の状況とは大きく異なり、むしろ一九世紀末の『国民之友』などに近い。その意味では三、四十年の時差があるとも言える。「ぜんたい」を副詞として使うこと自体は決して珍しいわけではないが、当時の語法としてはすでに少し前のものということになる。

メディアが発達した現在でも、流行語などは微妙に中央と地方で時差があったりする。また、言葉が伝わる速度については、井上（二〇〇三）によれば、大体年速一キロメートルであるという。当時、書き言葉の発信は東京・大阪など大都市圏が中心であり、そこでの言葉の微細な変化は、岩手に拠点をおいていた宮沢賢治に伝わるまでには多少の時差があったことは十分考えられる。今回取り上げた「ぜんたい」の副詞的な使用も、中央での出版物での使用状況と異なるのは時差のせいと言えるかもしれない。

ところで、三で「くらい」について考察したが、この「くらい」の用法についても時差の問題が関係していそうである。

そもそも「くらい」が副詞として使われるのは比較的新しいことだとされている。『日本国語大辞典第二版』の「くらい」の語誌では、次のように解説してある。

副助詞としての用法は、古代には「ばかり」が担っていたが、中世には「ほど」に移り、中世以降、次第に「くらい」が用いられるようになった。用例は、江戸時代前期には少ないが、後期になると口語資料に多く見られるようになり、この頃に口語として一般語化したものと思われる。地の文では、江戸時代後期になっても「くらい」よりも「ほど」が用いられることが多い。

さて、「くらい」について前稿では、違和感がある例として、「くらい」の前に「の」が入る次の例についても取り上げた。

六正めの鹿は、やつと豆粒のくらみをたべただけです。(鹿踊りのはじまり)

しかし、「くらい」は元は「位」の意の名詞なので、助詞となつてからも接続の形も体言にかかる形を取る場合がないとも言ひ切れない。例えば、指示代名詞が前に付く場合は、「くの」と「くれ」とどちらの形も可能である(例「このくらい」^{「くれくら」})。

これらのことから、前稿では「の」が間に入る先の例は少し古い言い方である可能性を指摘した。とはいえ、こちらは、「全体」の場合とは異なり、C H Jで調べても当該例のように「の」につく副助詞「くらい」の例は見当たらない。

ところで、このような話を授業をしたところ、学生から「この「くのくらい」という表現に違和感はないのだが、方言か」という趣旨の質問を受けた。この学生は岩手県出身である。そこでこの例についても、先の「ほしいくらい」と同時に学生にレスポンスカードに記入してもらったところ、殆どはこの「の」については不要であるとしたが、やはり岩手県(盛岡市・花巻市)出身の学生には数人、違和感はないという人があった。この「の」を入れる用法は、岩手では馴染みのある言い方であるとする、これも、少し古い言い方が岩手にみられるという意味で、時差の表れと言えるかもしれない。

さらに、三で取り上げた「ほしいくらい」か「ほしいだけ・すきなだけ」かということにも時差が関わる可能性がある。先に「くらい」は副助詞としては比較的新しく「ばかり↓ほど↓くらい」と変化した経過があることを紹介したが、「だけ」という副助詞は「くらい」よりさらに新しい副助詞で、江戸期くらいに定着したとされている。

現在みられる「ほしいだけ」「すきなだけ」は、B C C W Jにはみられるが、C H Jにはみられないことから、戦後になつて使われるようになったとみられる。近代以前に、東京あたりで「ほしいくらい」が「望んでいる十分な量」の意味で使われた実例が見当たらないので、「ほしいくらい」から「ほしいだけ」への移行があったという確証はないが、少なくとも「ほしいだけ」は新しく生まれた言い方であろう。そして、現在の岩手出身の学生たちが「ほしいくらい」「すきなくらい」に違和感をもたないという一方で、「ほしいだけ」「すきなだけ」の方を使うという学生もいるということは、岩手では現在「くらい」から「だけ」への移行が進行中であるということになる。これは「だけ」の広がりには時差があるからとみることでできよう。

今回紹介したのは一部分にすぎず、また、日本語学としては細かい論証が足りないきらいはある。しかし、宮沢賢治の言葉遣いは、方言以外のところも含め全体として岩手の人の言葉遣いであるとは言えよう。その分、他の地域の人々に比べて、岩手の人々が宮沢賢治の言葉に馴染みがあることは間違いない。宮沢賢治がこれほどまでに地元の人々に愛されるのもそれゆえではないかと思ったりするのである。

注

(1) 「コーパス」とは、さまざまな言語の資料を体系的に収集し、研究のための情報を付与したデータベース。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)は国立国語研究所が中心となつて作成された、現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために様々な資料の日本語を集めたデータベース。ウェブ上及びDVDによつて利用可能である。

(2) 『日本語歴史コーパス』は古代から近代までの日本語の資料を集めたコーパスで、近代については、現在、明治・大正期の雑誌のデータが公開されている。

参考文献

- 井上史雄 (二〇〇三) 『日本語は年速一キロで動く』(講談社現代新書)
- 川越めぐみ (二〇〇八) 『特集…おのまとべ 東北方言的宮沢賢治オノマトベ考察』『国文学解釈と教材の研究』第五三巻一四号
- 国立国語研究所 (二〇一五) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』バージョン1.1 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/>
- 国立国語研究所 (二〇一六) 『日本語歴史コーパス』バージョン2016.10 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/ch/>
- 小島聡子 (二〇〇六) 『注目の多い料理店』の言葉について』『アルテスリネラレス 岩手大学人文社会科学部紀要』七八
- 小島聡子 (二〇〇八) 『宮沢賢治の童話の語法について——副助詞「くらい」の用法を中心に』『言語と文化・文学の諸相』(岡田仁教授・笹尾道子教授退任記念論文集)
- 小島聡子 (二〇一三) 『宮沢賢治と浜田広介の語法に見る方言からの影響』『国立国語研究所論集』五
- 小林隆・澤村美幸 (二〇一四) 『もの言いかた西東』(岩波新書)
- 野村剛史 (二〇一三) 『日本語スタンダード歴史——ミヤコ言葉から言文一致まで』(岩波書店)
- 牧原登 (二〇一四) 『大声のことばとその周辺』
- 三井はるみ・井上文子 (二〇〇七) 『方言データベースの作成と利用』小林隆編『シリーズ方言学4 方言学の技法』(岩波書店)

【付記】

本稿は、平成二十八年年度岩手大学研究力強化支援経費及び科研費(16K02716)による研究成果の一部である。

(一)じま・さとこ、岩手大学准教授